

ASEAN プログラムの報告

伊 井 駿 登
Takato II
物質化学科 2年

1. はじめに

ここでは ASEAN グローバルプログラムでの活動を報告するが、このプログラムの学習目標は、「経済発展が望ましい東南アジア諸国では日本の企業、技術者が社会・産業では一体どのような役割を果たしているか、また実際に行くことによりどこまで進展しているのかを目にする」ことであった。

2. 参加目的

私がこの ASEAN プログラムに参加した目的は二つある。一つ目は、自分自身が大学生活で様々な PBL や討論に参加したりしたときに、一つの事柄に対して多方面な考え方をもちたいと思ったからである。このプログラムではベトナム、シンガポールと現在経済発展がめまぐるしい国の企業に行くことで、今の世界の社会の流れや世界での日本の立ち位置等の知識を増やせることに魅力を感じた。また、同じアジア圏でも自分と同年代の子たちはどのようなことを考えながら過ごしているのか、どのような生活をしているのかなど、興味あることがこのプログラムにはあり、これらの体験が自分自身の固定観念を崩してくれ、視野が広がることを期待したためである。二つ目はその国の文化を直接目にしたいと思ったからであった。私は日本以外の国に行ったことがなかったため、これを機にグローバルな見方やとらえ方ができるのではないかと思ったことや、二か国それぞれでの歴史的背景を知り、日本と似た歴史または違った歴史があるのか、どのようにして現在のベトナムやシンガポールができたのかなど、インターネットで調べられることだけではなく、直接生の声も聴きたいと思ったためであった。

そこで、個人の目標としては言語や文化が異なる様々な人々とコミュニケーションを交わすことに

より、異文化に対する理解を深めること、かつコミュニケーション能力を高めることとした。そして、日本で生活しているだけではわからない言葉の違いや文化、考え方の違いを体験することによって、また、思った通りに行かないことや予想外のことを経験することで、未知の世界に飛び込む行動力、最後までやり抜く根性、自分の頭で考え課題を解決する能力等、これらのグローバル社会で生きていくために必要と考える能力を向上させるということも目標とした。

3. 研修内容

プログラムの学習目標は、ベトナムでは企業訪問と「鈴木栄光堂社の飴をベトナムで売るには？」という課題でハノイ工業大学の大学生と共同で行う PBL、シンガポールでは Google 社等の企業訪問と南洋理工大学で授業を受けたりするアクティビティ、ビジネスパーソンとの交流会や、個人投資家の加藤氏の講演会を受けたりする、とても内容の濃いプログラムであった。この中で私がとても印象に残ったのはハノイでの企業訪問であったので以下にそれを報告する。

私たちはこのプログラムのメインとなるアクティビティとして、『ベトナムで飴の売り上げをよくするには』という課題での、ベトナムの大学生との共同 PBL があった。ここでは渡航前から、SNS を用いてベトナム工業大学の学生と意見を交わしたりした。これに関連したプログラムとして、ベトナムでは更に現地の情報を得るために鈴木栄光堂さんのべ

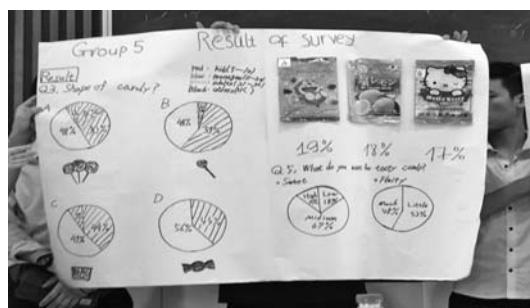


写真1 PBL での英語発表時の資料 (ポスター)

トナムの飴工場に訪問できた。

工場内では、鈴木栄光堂社の起業から現在のベトナム進出までの歴史や飴の作り方を聞いたり、質疑応答などを行ったりした。飴を作っている工場内は、飴の材料を溶かし合わせるため大きな鍋窯に高火力の火を当てており、製造ラインの見学はとても暑く、私たちはガラス越しであったが汗が止まらなかった。しかし、中で作っている従業員の方は衛生上のため長袖長ズボンとさらに暑いと思われるのだが、飴を作っている真剣なまなざしから暑さは感じられず、とても綺麗なのが印象的だった。また、私は個人的に、普段食べている飴というものがどのような工程や機械を用いてできているのか目にできて、大変楽しかった。次に工場長への質疑応答では、様々なことを教えていただいた。ベトナムは男性よりも女性のほうが真面目でよく働き、ベトナムの平均月収は日本円でいうと2~3万円ほどであるということであった。興味深かったのは、製造工場であるため深夜も稼働させたほうが良いと、日本らしい考えを提案したところ、ベトナム人は霊的存在を信じている方が多く却下された、といわれていたが、まったくの乗田ではないだろうと、大変驚かされた。また、日本は何か新商品ができたときは大手スーパーにおいていいか周るのがメジャーだが、ベトナムはスーパーよりも地域密着型の小売店が多いため、そこにこまめに行き、かつ陳列も自分たちで行うというスタイルとのことで、そのような違いに驚いた。

鈴木栄光堂ベトナムの次に行かせて頂いたのは、インターネット関係を主とする NTQ という会社であった。NTQ 社の8割以上の売り上げは日本からであるため、中には日本語をしゃべれる方も居られた。そこで言われていたことは、日本は世界の国々



写真2 鈴木栄光堂ベトナム工場の風景

と比べると大変細かいことが気になる方が多いという見方だった。技術じゃの話では、日本からの仕事としては、携帯の修理などで店で順番待ちをする際の整列券が出る機械や、自分のカードキーでパソコンの ON/OFF をできたりする警備システムを作ったりしているとのことだった。これらのネット社会に欠かせない仕事をされる方たちと直接話ができて、学生時代にはどのようなことを考えて過ごしていたかなど、とても身になる話が聞けた。

4. まとめ

私は日本とベトナムは第一次産業、第三次産業ともにお互い支えあっているということを感じた。今回、直接訪問して、こんなにも関連性が深いことが分かったが、その関連性と比較すると、ベトナムには日本人がまだまだ少ないと感じた。

また、今回の経験でグローバルで働いている方は、英語が話せるというありきたりなイメージではまとめられず、会った方全員が目標に向かってとても生き活きと頑張っている集中力の高い人達だと感じ、自分のグローバル人間のイメージを一新できた。